
出来損ない騎士と老いぼれ騎士物語

川島徹也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出来損ない騎士と古いぼれ騎士物語

【Zコード】

N7951A

【作者名】

川島徹也

【あらすじ】

若いだけがとりえの半人前騎士とベテランと言えば聞えがいい頑固な気質の古いぼれ騎士の物語です。

ゴンゾール国。

東大陸のほぼ西端に位置する大国だ。

はるか西方の大国や南方のセレス公国から度々侵略を受ける事があつたが、全て跳ね除ける事が出来るほどの軍事大国でもあつた。

侵略を受ける事があつても国が揺るがなかつたのは、代々の賢王の善政と歴戦の猛者達の活躍によるところが大きかった。

聖暦一〇八〇年。当時の国王に次ぐ権力を持つ国民議会。

その防衛部門の長官によつて引き起こされたクーデターが起つされた。

国王は暗殺、議会は解散され、政治の決定力を自身に集中させ独裁政治を行つた。

国民のことを考えない独裁者に怒りをなした国民の中には解放軍として立ち上がる者もいたのだが……。

圧倒的な力を持つ独裁者を前に勇敢な戦士達は次々に倒れていつた。

国民達は半ばあきらめていた。もう平和な時代は訪れないといふ。しかし、同年の冬に大きな変動が起きた。

ゴンゾール国北部地方と東部地方の独立である。

この二国の独立により解放軍の活動は活発化、ついには独裁者を倒す事に成功した。

やがて、行方不明だつた先王の息子が帰国。そして空席だつた王位を継承した。

こうして平和が訪れたのであつた。

そして今回の物語は独立を果たした東ゴンゾール国に生きる一人の騎士の物語である。

第一話 遺跡編 前編

聖暦一〇八三年 春 東ゴンゾール国郊外の遺跡内部

男の正面には巨大な扉がそそり立っていた。

その途方もなく大きな扉は、まるで来るもの全てを拒んでいるかのように重たかった。

扉の前には一人の男が腕組みをして立っていた。

鉄製の鎧を身に着け、腰には飾り氣のない長剣が携えられている。この男の名をグードリッヒと言つ。

東ゴンゾール国警備兵团に所属している騎士である。

中肉中背で特にこれといった特徴はなく、良い意味でも悪い意味でも平均的ということだ。

「押しても開かない。引こうにも取つ手がない。一体どうすればいいんだ？」

グードリッヒはかれこれ扉に拒まれ続けて十分近くが経過していた。

「ここまでは順調だつたのになあ」

頼りなくため息をつきながら言つた。

「まったく面倒な事になつたのう」

突然男がもう一人の男が現れた。

「マベラスさん。どうでしたか」

「だめじゃ。他には入れそうなところはなかつた」

マベラスと呼ばれた男は言つた。

この男もグードリッヒと同様に警備兵团に所属する騎士だ。鉄製の鎧ではなく、レザーアーマーを着込んでいる。

グードリッヒと比べると小柄で、身長は並の女性より低い。

さりに両腕は細く、とても華奢で戦場に立つ人間には見えなかつ

た。

しかし彼がひとたび剣を抜けば、並みの一般兵なら五人同時にしても負けはないそうだ。

だが、騎士としては高齢で、今年で五十七になるそうだ。

「功城兵器でも持つて来るべきじゃったかのう」

「破壊槌ですか。あんなもの一人じゃ持ち運べませんよ」

「そうじゃな」

静かな遺跡に一人の笑い声が響く。

そしてひとしきり笑うとすぐに一人はまじめな表情に戻った。

「でもどうしましょうか」

まじまじと扉を眺める一人。

マベラスは扉の正面まで来るとそつと扉の表面をなぞった。扉に施された幾何学模様の彫刻はまるで芸術作品のようだ。

「少々惜しい気がするが、ぶつ壊すしかあるまい」

マベラスはそう言いつと腰に帯びている片手剣に手を掛ける。

「ぶつ壊す？ その剣ですか？」

「そうじゃよ。それよりわしから離れろ」「そんな無茶ですよ。剣で扉が壊せたら苦労しませんよ」

嘲笑うかのようにグードリッヒは言った。

するとマベラスはむつとした顔になり有無も言わぬ口調で二つ言つた。

「言った。

「早く離れる」

マベラスの迫力に気おされ、言われたとおりにするグードリッヒ。グードリッヒが離れたのを確認すると、手を掛けていた剣を抜き放つた。

そしてなにやら小言で呴き始める。

「我が剣に宿りし大いなる力よ、今こそその力を解放し己が刀身に宿らせよ」

そう呴えると、刀身は赤い光を放ち、数歩離れているグードリッヒにも感じられるほどの熱を放ち始めた。

そしてその光は徐々に燃え盛る火炎にその姿をえていった。

「 てやあー 」

気合のこもった声とともに燃え盛る炎の刃が巨大な扉に向って振り下ろされた。

「 マベラスさん。 こんな事ができるんだつたら最初からひづすればよかつたじゃないですか 」

「 簡単に言わんとくれ。 結構身体に負担が掛かるんじゃ 」

確かにマベラスは少し呼吸が乱れている。

二人の前の巨大な扉には、ちょうど人が一人通れるぐらいの穴が開いていた。

鉄製の扉は鋳型に流し込む前の溶けた鉄のよつに真っ赤だ。

「 でもこれはもうやらないほうがいいですね 」

「 そうじやな 」

扉に穴を開けてからもう十分近く経過したが、まったく冷める気配はなく触れるどころか近寄る事すらできなかつた。

「 まあ、しばらぐの間は休憩するしかないのう 」

そういうとマベラスはその場に腰を下ろした。

グードリッヒは少し躊躇したものの最終的にはマベラスと同様に腰を下ろした。

「 この中に何があるんでしょうかね 」

グードリッヒが呟くように言った

「 さあな。 入つてみなすことには分らんよ 」

結局一人が扉をくぐる事ができるようになったのはそれからさら
に數十分後だつた。

真つ赤だつた扉も今では冷えて固まつてゐる。

「先に入りますよ」

「気をつけるよ」

「分つてますよ」

グードリッヒはランタンを片手にと熔けた扉をくぐりその後をマ
ベラスが追う。

「真つ暗じゃなあ」

「そうですね」

部屋の中はランタンの明かりでは照らしきれておらず、漆黒の闇
が広がつていた。

グードリッヒは背負い袋から松明を數本取り出すとランタンの火
で松明に火をつけ、部屋の隅のほうに投げ置いた。
すると真つ暗だつた部屋は少しだけ明るくなつた。

「何もないですね」

「この部屋のはずなんじやが……」

マベラスは羊皮紙の地図も見ながら言つ。

地図を頼りに遺跡の最深部に来たのだが、目的の物はまだ見つか
つていない。

二人が捜し求めている物、それは剣だ。

中央、北、東の三つのゴンゾール国がまだひとつだつた頃。
数多の敵を退けてきた将軍がいた。

彼は戦いが起つたたびに常に前線で戦い勝利し続けてきた。
民衆はその強さと愛国心に敬意を評し祖国の英雄と呼んだ。
祖国の英雄にして無敵の強さを誇つた男。将軍エノク。
そんな彼が三年前突然亡くなつた。

防衛長官の罷にはめられ、クーデター最初の被害者となつたのだ。
しかしどのように経緯で殺害されたのか知る者はおらず、詳細
は闇の中である。

彼の装備品は遺体とともに彼の親族に引き取られたのだが、剣だけが見つかっていなかつた。

一応調査団が派遣され一通りは調べられたのだが発見されなかつたのだ。

その後調査は三国が独立するとともに調査は打ち切りと発表した。将軍の親族達は中央ゴンゾール国に仕える武官の一族なので、東ゴンゾール国に入る事は外交上の問題から入国する事は難しかつた。そこで二人の出番である。将軍の親族とは顔見知りで、将軍の剣の調査を私的に依頼されたのだ。

「マベラスさん。これって何でしようか？」

部屋の奥の方かグードリッヒが呼んでいる。

「何か見つけたのか？」

「はい。これです」

グードリッヒはマベラスに布に包まれた何かを差し出した。丁寧に布の包みから取り出すと一本の剣があつた。

「この剣は……」

独特な装飾が施された鞘から剣を引き抜いた。

「間違いない。将軍の愛剣、“ペインキラー”だ」

魔力を帯びた希少金属“ミスリル”から作られたその剣は、淡く光を放つていて。

「軽いな。私の剣より軽い」

マベラスは自分の愛剣と持ち比べていた。

マベラスの剣もミスリル製の剣で、かなりの業物なのだが、将軍の剣はさらに上の行くのだ。

将軍の剣は数百年前の古代王朝時代の有名な付与魔術師の手によつて作り出されたのだ。

この時代の魔術師が魔力を付与した剣は永久的に使う事ができ

る上に、に何かしらの特殊能力が付『』されている事が多かった。

「この剣、いくらぐらいするんでしょうね」

グードリッヒがぼそっと呟く。

「小さな城なら余裕で買えるだろうな

「そんなにするんですか！」

「あくまで予想だがな。でもわしの剣だって郊外に庭付きの家が変えらるぐら』の値はするぞ

「そなんですか……」

グードリッヒは自分の剣を見つめながら言った。

「まあ、お前の剣だつて悪くはないぞ」

「でも……」

「自分の剣を信じるんじや」

マベラスがそう言つと、グードリッヒは渋々だが頷くのであつた。しかし、正直なところグードリッヒの剣は一つの剣とは違ひ鉄製の剣だ。

それでも、かなり上質な剣には違ひないのだが、一つの剣と比べると見劣りしてしまつ。

「さて、帰るぞ」

マベラスは将軍の剣を鞘に戻し自分の愛剣と一緒に腰こなす。

「もう帰るんですか

「物も見つかつたし、早く帰つてまともな飯が食いたい」

確かに最近は硬い乾パンや香りの悪い干し肉しか食べておらず、町育ちの一人にはもう我慢の限界で胃の方も受け付けなくなつてしまつ。それに水ではなくエールやワインが飲みたい。

「そうですね。早く帰りましょ」

グードリッヒはきびすを返し扉のほうへ向つた。

「しばし待たれよ

突然後ろから声が聞こえた。

「マベラスさん。呼びました？」

振り返るグードリッヒ。

「いいや。わしじゃないぞ」

「じゃあ誰なんでしょうかねえ？」

「誰じや。わしらを引き止めるのは」

「マベラスは部屋のさうに奥のほうに向つて叫んだ。

「我は封印されし知識と技術の守護者なり」

「もしや……ガーゴイルか」

「そう呼ぶ者もいる」

その言葉に一人は一瞬凍つた。だが次の瞬間には冷静さを取り戻し一人とも剣を抜く。

「汝らは我らの領域に踏み入つた。主の命により汝らを殺さなくてはならぬ」

そして暗がりの奥のほうで大きく羽ばたく音。

「グードリッヒお前は下がつていろ」

グードリッヒは一步下がり剣を構える。

マベラスはガーゴイルに向かつて切りかかっていた。

「てやあああ」

マベラスは相手を威嚇するように咆哮すると、大きく跳躍し飛びたとうとしているガーゴイルに向つて一閃を放つ。

ガーゴイルはあわてて避けようとするのだが、間に合ひはずはなかつた。

右の翼を捉えガーゴイルは低く唸る。

怒りと憎しみの目で睨みつけると鋭い鉤爪を振りかざす。

それをマベラスは軽やかに宙返りでかわす。

「危ない」

グードリッヒは叫ぶのだがマベラスはまったく気にした様子もない。

ガーゴイルは大きく口を開く、それを見たマベラスは大きく横に跳躍した。

燃え盛る火炎はマベラスが先程までいた場所を黒く焦がす。

「まったく、わしはウェルダンよりレアのほうが好きなんじゃが」「そういうて短く笑う。

「汝はステーキがお好きか、我は生肉の方が好きである」

そう言つてマベラスを鋭い牙で噛み碎こうとする。

「随分とお喋りなガーゴイルだ」

牙を剣で受け止める。

「生意気な奴にはこいつじゃ」

マベラスは飛び退りながら、左足の投擲用の短剣を取出して投げつけた。

短剣は真っ直ぐ飛び、狙いたがわずガーゴイルの口の中に入った。悲鳴のよつたな咆哮を上げるガーゴイル。

「口は災いの元じゃ」

さらに大きく後ろに跳躍すると、グードリッヒに向つて叫んだ
「はい！」

マベラスは後方で呪文の詠唱を始めた。

グードリッヒはすぐさまガーゴイルに向つて駆け出した。
まだガーゴイルはまだひるんでいるようだつた。

グードリッヒは真っ直ぐ正面に突き出すと勢いを生かして突きを繰り出した。

確かな手ごたえがあり、ガーゴイルの胸に深々と剣が突き刺さつた。

そして次なる一撃を放とうと剣の引き抜こうとした。しかし……。剣を抜く事ができなかつた。深く刺さりすぎたのである。

その一瞬の隙をガーゴイルは見逃さなかつた。

激しい憎悪のこもつた鉤爪の一撃がグードリッヒを襲う。

「ぐはっ」

あまりの衝撃に息ができなくなり、口の中は血の味がする。

鎧が見事に裂けている。皮膚が切れていないとこ見ると直接的な傷はないようだ。

「あともう少し、もう少ししなんだ。頑張れ自分」

自分で自分を励ますと、立ち上がりガーゴイルと対峙する。

「さて、どうしようかな」

もう攻撃手段が残つていなかつた。剣は怪物の胸に突き刺さつた。まだし、マベラスはまだ呪文の詠唱中だつた。

「素手よりはマシかな」

棟的用の短剣を両手に一本ずつ持ち、構えた。

グードリッヒはガーゴイルを睨みつけた。

ガーゴイルもまたグードリッヒを睨みつける。

「結構目つき悪いんですね。そこら辺のじろつきよりよっぽど迫力があります」

グードリッヒは動かない。

ガーゴイルもまた動かない。

男と怪物のにらみ合いがしばらく続く……。

そしてその均衡や破られた。

「グードリッヒ、苦労だつた。もういいぞ」

グードリッヒはその言葉を聞きすぐにマベラスに前線を譲つた。マベラスはいつの間にか長い呪文の詠唱を終えていたのだ。

「さあ、我が刃受けてみよ」

真紅の光を放つ愛劍を天に掲げながら、芝居がかつた口調で言つ。

「俊足のマベラス、参る」

マベラスはガーゴイルに向つて駆け出した。風のようす。すれ違ひざまに一撃を放つ。

何かが地面に落ちる音。ガーオイルの右の翼だ。目にも止まらぬ速さで次なる一撃を繰り出す。次は左の翼だ。

ガーゴイルは「反応する」とすらできない。グードリッヒも田で違うのが精一杯だ。

無駄のない動きでガーゴイルを次々と切り刻んでゆく。まるでそれは一種の舞いのようだ。

見るもの全てを虜にするようなその舞……。

気が付くとガーゴイルは死んでいた。

剣を一振りし異物を払い落とすと剣を鞘に戻し、きびすを返してこちらに戻ってきた。

「ちょっと無理しすぎたかもしかんな

「そうですね」

マベラスの両腕は火傷で赤く腫れ、全身傷だらけで出血もしていた。

グードリッヒ外傷こそ少ないものの、鎧は真っ二つに裂けていたし、剣もひしやげて使い物にならなかつた。

「でも、死ななかつただけマシですね」

「さすがにガーゴイル相手じゃきつかつたな

「今度こそ帰りましょう」

「そうじやな」

こうして一人は遺跡から去つた。

第一話 遺跡編 解説

「」では第一話に出てきた単語ないし用語について説明しようと
思います。

聖暦「」の世界が神々によつて創設された年を元年とした暦の事
です。

警備兵团 東ゴンゾール国独自の警備部隊。國の正規軍なのだが、
基本的に國から独立していて、國に仕える騎士と言うより國に雇わ
れた傭兵に近いです。よつて軍事活動に用いられる事もほとんどあ
りません。もつとも軍事活動自体が少ないのですか。

騎士にしては高齢 現代日本では平均年齢は七十代後半ですが、
この世界のでは医療技術が未発達なので、一般市民の平均寿命は五
十代後半です。豪商や貴族、王族は比較的の環境が恵まれていて六十
代の後半ぐらいです。しかし、魔術師の中には百歳を超える者も
います。一応人間としての種の限界寿命は百歳前後だと考えられて
います。

中央、北、東の三つのゴンゾール国 聖暦〇八〇年にクーデター
が引き起こされ、期独裁政治が行われました。多大な軍事を背景に
統治を行つてきたので、真正面から抵抗活動を行つても解放軍に勝
ち目はなかつたので、比較的影響力の弱かつた東部地方と北部地方
の独立から解放を開始しました。独立が成功すると、その勢いに乗
じて一気に独裁者の暗殺までこぎつける事に成功し、そのあと殺害
された先王の息子が帰国し、独裁政治は終わりを告げました。その
後北部地方と東部地方の独立と自治を認めたので、元々一つだった
ゴンゾール国は中央ゴンゾール国、北ゴンゾール国、東ゴンゾール

国の二つの国に分かれたのです。

ミスリル 魔力を帯びた希少金属で、産出量も少なく、同量の金より高値で取引されます。かなり強固な金属で加工は困難ですが、魔力を用いて武器や防具にすると優れた性能を持つた物が出来上がります。しかもミスリルは錆びたり色あせたりしない為、かなり長持ちします。また、魔力を付与すれば半永久的に使う事が出来ます。

ペインキラー エノク将軍が保持していた事で有名なミスリル製の剣で形状はブロードソードに近く、古代王朝時代中期の付与魔術“灼熱のバーバス”によって作られた。どのような魔力が秘められているのかは不明です。

ガーゴイル 魔法によって生命と知性を与えられた魔法生物の一種です。外見は石像と非常に似ていて、目をつぶつてじっとしているとまず見分けはつきません。背中には翼が生えていて低空を飛ぶ事が出来ます。鋭い鉤で主に攻撃しますが、牙や尻尾などを使う事もあります。また、口からは炎を吐くことが出来ますが、相当疲れるらしいので吐く事はほとんどありません。ガーゴイルは石で作られることが多いのですが、その他にも鉛や鉄、銅など様々な金属で作られています。中でも魔力を帯びたミスリルで作られたものはかなり強く、並みの戦士では相手になりません。ちなみに今回二人が戦つたのはミスリル製のものです。

夕暮れ時の寂れた酒場のカウンター席に一人の男がいた。

まだ日も落ちていないのにその男は酔いつぶれていようつだった。
「マベラスの旦那。もうやめましょうよ」

酒場の店主はカウンターに突っ伏してこむマベラスに言った。

「まだじゃ。まだわしは飲めるぞ」

マベラスは突っ伏したまま呟く。

右手には空のジョッキががっちらりと握られている。

「旦那、体のこと少しあは気遣いなさいな

「ほつとけ。もう一杯だ」

マベラスはジョッキを掲げる。

「分りましたよ」

マベラスの顔は真っ赤だ。といふか全身真っ赤で、限界を超えたことは誰の目にも明らかだつた。

しかし酒場の店主はマベラスの頑固な気質を知っていたので、渋々ジョッキにエールを注いだ。

「おう、あんがとよ」

マベラスは一言もつぶやつと、カウンターに突っ伏してそのまま動かなくなつた。

「まったく、営業妨害もいいところだぜ」

店主の独り言が誰もいない酒場に響いていた。

鳥のさえずりが聞こえる。

日を開けると、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいるのが見える。

さわやかな朝なのにも関わらず頭が痛かった。

「一日酔いなんて情けない。わしも歳をとつたかのう

ベッドから上半身だけ起り、浴室を見回す。

散らかっていたはずの部屋はきれいに掃除され、テーブルの上には水差しとコップが置かれていた。

「グードリッヒの奴か……」

半人前の後輩の名を呴くと、立ち上がりベッドの脇の水差しに手をのばした。

そしてぐつとそれを飲み干す。

一晩置いてあつたので、かなりぬるかつたがそれでも皿はいくらか覚めた。

「とりあえず、飯だな」

マベラスはベッド脇の剣を帯刀すると、朝食をとるべく部屋を後にした。

「よひ、マベラスさんの！」登場よ

先日の酒場の扉を勢いよく開ける。

「らつしゃー」

がらんとした店の中に店主の威勢のいい声が響く。そして定位置のカウンター席の右端に腰を下ろす。

「いつもの」

店主は返事すると奥の厨房に消えていった。

そしてしばらくすると料理を持つても戻ってきた。

サラダとジャムパンのセット。マベラスお気に入りの朝食だ。

「そういうえば、いつもの若いのがいないです。どうしたんです」

「さあな、分らんよ。もう来てるかと思つたんじゃが

「まだ店には来てないよ」

「さうか」

そう言つと、ジャムパンを口の中に放り込んだ。

「旦那

「なんだ」

「噂をすれば何とやらつてやつだ

酒場の扉が開かれグードリッヒが入ってきた。

グードリッヒは手前のほうのテーブルに腰を下ろしたが、マベラスを見つけると立ち上がりカウンターのほうに歩いてきた。

「おはよー」「おはよー」

「うむ。おはよー」

挨拶の言葉を交わすと、グードリッヒは朝食のパンを頼んだ。そして出されたパンを小ちぎって食べ始めた。

「それだけで足りるのか？」

サラダを口に運びながらマベラスは言つ。

「足りるわけ無いじゃないですか。スープもサラダもポテトも欲しいんですよ」

小さなパンをかじりながら言つた。

「じゃあ、頼めばいいじゃん。旦那追加だ」

「いいんですよ。これでいいです」

慌てて注文を阻止するグードリッヒ。

「なんで頼まないんじゃ」

「お金がないんですよ」

小さく呟くように言つた。

「お金がないはずないだろう。この前報酬が出たじゃん」

この前の遺跡の搜索でそれなりの報酬が出ており、しばらくの間は多少贅沢をしても問題はないはずである。それなのにお金がないというのもどこか変な話だった。

「剣と鎧の新調にお金がかかったんですよ」

さらりと小さな声で言つた。

「そうか。それで買ったのか」

「鎧は新調できたのですが、剣は少々厳しいかもしません」

グードリッヒはため息をつきながら言つた。

「ふびんな話ですねえ」

酒場の旦那は黙つて温かいスープをグードリッヒに差し出した。

「これは……」

「私からのお「じ」だよ。味わって食べな

「ありがとうございます」

田に薄つすらと涙を浮かべながら言った。

田も止まらぬ速さでスープを口に運ぶ。

「若い騎士さんよ。そこまでお金がないのか

グードリッヒは黙つて頷く。

「田頭から貯金しておかないのが悪いんじゅ よ

「マベラスさんだつて、報酬や恩賞が出るたびに大酒飲んでほとん
ど使い果たしちゃうじゃないですか」

マベラスはグードリッヒの鋭い指摘に何も言い返せなかつた。

「まあ、田那が大量に酒を飲んでくれればこっちも生活が潤うから
構わないけど、動けなくなるまで飲むのはやめて欲しいねえ」

「そうですよ。昨日だつて大変だつたんですから

「すまん」

マベラスは首の後ろのあたりをぼりぼりと搔きながら謝つた。

昨日酔いつぶれたあと、グードリッヒが引き取りに来るまでマベ
ラスは店のど真ん中でいびきをかきながら大の字で寝ていたのだ。
自覚があれば問題が無いのだが、まったく悔い改めようとはしない
のがマベラスの悪い所だ。

「潤うのは財布の中だけでいいからな。どうか今度は田頭まで潤す
事のないようにしてくれよ」

田那がそう言つてグードリッヒは笑つていた。マベラスはただ謝
り続けるのであった。

「それはさておきグードリッヒさんよう

「なんです」

「金がないんだろ。小遣い稼ぎ程度にしかならないがちょっとした
仕事をやらないか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7951a/>

出来損ない騎士と老いぼれ騎士物語

2010年10月10日16時51分発行